
大学院教育課程の新たな展開に向けて

木俣 元一

教育研究推進室長(美学美術史学)

名古屋大学大学院文学研究科教育研究推進室年報『メタプティヒアカ』第3号をここにお届けします。

私たちの研究科で平成18年度に開始された「『魅力ある大学院教育』イニシアティブ」事業は、平成19年度末で国の施策による助成期間が終了しました。事後評価では、皆様からのお力添えもあって、幸いに高い評価を得ることができました。もちろん、助成が終わったといいますが、この取り組みそのものが終わってしまったわけではありません。今後は、研究科独自の取り組みとして継続し、大学院の教育課程に組み込んで行くことが重要な課題となります。平成20年度には小規模ながらも、文学研究科マネジメント経費を基盤として「人文学フィールドワーカー養成プログラム」の調査に大学院生を派遣し、FD活動も展開することができたことを深謝申し上げます。こうした活動の成果は、本号にまとめられていますので、ご確認頂ければと思います。また、平成21年度からは博士前期課程の共通科目のなかに本プログラムを位置づけることにより、この事業が研究科の教育課程のなかに一体化されます。そのため表面的にはこのプログラムの存在が見えにくくなりますが、私たちの身の丈にあった規模で維持していくことが必要となります。

平成21年度からは、博士前期課程において見直しを図った研究科の共通科目が新たにスタートします。私たちの研究科では、各専門（研究室）で行われている研究者養成を主眼とした専門性の高い教育に重心が置かれていることは確かだと思いますが、大学院重点化後入学してくる学生の資質が多様化している状況が明らかにありますし、人文学専攻だけから成り立つ組織としてまとまった形で教育を展開することが求められています。その方向での第一歩を踏み出すことができました。これらの科目には、大学院レベルにおける人文学分野の教養教育ともいえるような役割が期待されています。これまでに培われてきた専門教育の伝統を保持するためにも、このような取り組みは大切であると考えられます。

大学を取り巻く状況の変化により教員はますます多忙になってきています。しかし、私たちに与えられた時間やエネルギーが無限ではないことを考えるなら、すべてに全力を傾注するのではなく破綻は避けられません。高度な研究活動が基盤となって質の高い教育を支えるためには、どこにどの程度の力を配分するのがもっともふさわしいかを組織として練らなければならないと思われまふ。これまでに作りあげてきたものをできる限り壊さずに、同時に、新たにもたらされた状況に対応する体制を探る時期に来ているのではないのでしょうか。本号でご覧いただけるように今年度も多数のワークショップを開催いたしました。こうした問いを考えるためのヒントをそこに見いだせると思っています。